

ゆう子ちゃんありがとう

昭和六十三年 度 三年 女児

三年生になってマラソンカードがわたしの手にわたった時、びっくりして手がふるえそうになってしまった。走るきよりが六十九キロメートルになったからだ。バスリようこうで行ったかも水ぞくかんまでの行きかえりのきよりだそうだ。

これからこんなに走らなければならぬなんて、ゴールにつけるだろうか、それとも、雪がふっても走らなければならぬだろうか、とても心ばいだった。

はじめ、わたしは一人で走っていた。マラソンなんてなければいいの、にと思いがら走った。苦しくて三しゅうくらいすると、もう走れなくなりました。

そのうち、同じクラスのゆう子ちゃんもいつもグラウンドで走っているのに気がついた。いつも、わたしの前を走ったり、後ろを走ったりしていた。

わたしは、いつのまにか、ゆう子ちゃんとならんで走る

ようになった。走るのがとくいなゆう子ちゃんと足のおそいわたしとでは、いっしょに走るなんておりのような気がした。でも毎日なかよく走ることができた。

わたしたちが走る時は、いつもくつばこの所でくつをはきかえながら、

「きょうは、九しゅう走ろう。」

「きょうは、十一しゅう走ろう。」、目ひょうを立てる。ときには、ゆう子ちゃんが、四十しゅう走ろうかと、ふざけていうので、だんだんマラソンが楽しくなってきた。でも、グラウンドに一步足を入れたとたん、ドンと広く見えてしまふ。

あと六しゅうでゴールという日、ゆう子ちゃんは、

「今日でゴールだね。さあ、いそごう。」と、手をぐんとひっぱった。今日でおしまいなんて、信じられないような、ずっと待っていたような気がした。

一しゅう目、二しゅう目、だんだんつかれて、足が死にそうになった。あつい日でもないのに、のどがカラカラで息をすうのもたいへんだった。五しゅう目に入ると、まだ五

しゅう目なのときげびたい気持ちで、もう歩くしかない  
と思ったとたん、

「あと一しゅうだね。がんばろう。」と、ゆう子ちゃんが  
声をかけてくれた。また一生けんめい走って六しゅう  
目に入った。足だけでなく手までがいたい。もう少し、も  
う少し、となりのゆう子ちゃんの息がそう言ってるよう  
だ。ゴールが目の前になった時、わたしとゆう子ちゃんは、  
足を大きくふみこんで、

「やったあ、ゴールだ。」と、いっしょにはく手した。は  
あはあと、息は苦しかったが、うれしくてうれしくて、口  
はわらいたくてしかたなかった。

できそうにもないと思った六十九キロメートルのマラ  
ソン。ゆう子ちゃんがはげましてくれたり、いっしょに走  
ってくれたから、ふざけたりして楽しませてくれたから、  
さい後まで走れた。ありがとう、ゆう子ちゃん。